

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Predictors of movable type left atrial appendage thrombi in patients with atrial fibrillation

(心房細動患者における可動型左心耳血栓の予測因子)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学 専攻 器官・代謝制御 系
循環器病 学 (指導教授 石原 正治)

氏 名 尾下 武

心房細動 (AF) 患者における左心耳血栓 (LAAT) は心原性血栓塞栓症の主な原因であり、特に可動型 LAAT は血栓塞栓症のリスクが高いことが知られている。しかしながら可動型 LAAT の発生にかかわる因子についてこれまでの検討は少ない。今回我々は心房細動 (AF) 患者における可動型 LAAT の予測因子について検討した。心房細動に対する除細動またはカテーテルアブレーションの前に経胸腔内心エコー検査 (TEE) を受けた 827 人の連続した患者について、レトロスペクティブに調査を行った。心臓手術を受けた患者や著しい弁膜症のある患者は研究から除外し、残った 758 例 (年齢 67.6 ± 9.3 歳、男性 535 人) について本研究の対象とした。各種臨床データは TEE を施行した時点で評価を行った。LAAT は臨床データを盲検化した 3 人の独立した医師によって、可動型と固定型に分類された。LAAT は 758 例中 57 例 (可動型 11 例、固定型 46 例) で検出された (7.5%)。単変量解析では、可動型 LAAT 患者は対照群 (固定型 LAAT あり + LAAT なし) に比べ、E/e' ratio 高値、左室駆出率 (LVEF) 低値、左房容積係数高値、C 反応性蛋白高値、非発作性心房細動の有病率高値、ワルファリン服用割合高値 (73% vs 21%, $P < 0.0001$)、構造的疾患の有病率高値が有意差をもって認められた。多変量解析では、E/e' ratio、LVEF、ワルファリン服用は可動型 LAAT と有意に関連していた。可動型 LAAT の発生率は、E/e' ratio が高く (E/e' ratio > 12.7)、LVEF が低下している患者 (LVEF $< 44\%$) で最も高値であった (49 例中 7 例、14.3%)。E/e' ratio と LVEF は心房細動患者の可動型 LAAT を予測する可能性が示唆された。リスクの高い患者には可動型 LAAT に対する強力な抗血栓療法や外科的治療を念頭に置き、早期に TEE を行う必要があると考えられる。